

シャンソンに魅せられて The Charm of “Chanson”

戸賀崎博保

Togasaki Hiroyasu

“シャンソン”という言葉に出逢ったきっかけと云えば、私が高校生の頃、相撲取りで“関脇”に「信夫山」^{しのぶやま}という人気力士が趣味はシャンソンであるとインタビューで答えていた時からである。

高英夫、石井好子、深緑夏代、越路吹雪、芦野宏……といったシャンソン歌手の歌声が時折耳に入って来ていたが、自ら進んで聴こうと当時は全く思っていなかった。

1963（昭和38）年に立教大学のフランス文学科第一期生として3年編入した折になかにし礼がいた。彼はアルバイトとしてシャンソンの訳詩を手がけていた。『パリ祭』と銘打ったシャンソン・コンサートの切符を彼から一枚貰って、日本語シャンソンの雰囲気は私は初めて味わったのである。その時は自らステージに登場し、真っ白く厚化粧した顔でパントマイムを披露したのである。そう云えばその4年前の1959（昭和34）年に石井好子が立教大学の講堂（タッカーホール）でシャンソン・コンサートを開いた事があった。私が経済学部に入學した年の秋であった。すらりとした長身、顎の張った顔で、にこやかに、表情豊かに、日本語とフランス語で歌っていた。

経済学部の4年間、『グリークラブ』（合唱団）で宗教曲、黒人霊歌、フォスター名曲集、シューベルト歌曲集、日本民謡、ミュージカル、オペラ合唱曲集、そして清水脩^{おきむ}、多田武彦などの邦人作品に至るまでいろいろなジャンルの歌に接したが、シャンソンと演歌はレパートリーとして取り上げられる事がなかった。

経済学部を卒業すると同時に『グリークラブ』（合唱団）を退団し、その年にフランス文学科の3年に編入すると、私は『将棋部』に入ったのである。その2年間、シャンソンへの関心は皆無に近かったと云って良いかもしれない。同級生のなかにし礼が『銀パリ』で訳詩の仕事をしていると聞いていたので、ある時昼間の『銀パリ』なるものを確かめに一人で出かけた事がある。入って行くと、左程広くない部屋に客は私一人だけであった。入場料がドリンク付きで1,600円であった。コントラバスが一人いて、目の大きい小柄で痩せた30歳位の女性が真剣な面持ちで歌っていた。私が入場す

る前から歌っていたのである！しばらくすると一組の若いカップル客がテーブルに着いた。伴奏にピアノがなかったのが不思議である。『銀パリ』に入ったのは私にとってそれが最初で最後であった。

フランス文学科に編入学してから約2年間、私は声楽を個人レッスンで学んでいた。コールユーブーゲン、コンコーネと云った教則本と共にイタリア古典歌曲を通して、^{のぶやす}延安昭一先生から水道橋にあった「^{しょうび}尚美音楽院」という小さな専門学校で「ベル・カント」唱法が伝授されたのである。1年位経った頃、延安昭一先生がイタリアへ留学され、私は声楽からしばらく遠ざかる事となった。その後、フランス文学科を昭和40(1965)年に卒業し、修士課程を3年かけて1968年に修了し、1年後の1969年に南仏のモンペリエ大学の文学部に附設された『外国人の為の学院』に2年間在籍し、初級・中級の授業に精勤し、文法、会話、歴史、地理、絵画史、映画評論、フランス文学史等を学び、私にとって価値ある免状を取得して、1971年の2月に帰国したのである。

その年の4月から桜美林大学文学部の教壇に非常勤講師として立つ事となった。そして同年の秋期から玉川大学の非常勤講師として芸術学科、外国語学科、英文学科の1年生にフランス語の基礎を教える事となったのである。授業中にフランスの童謡やシャンソンを当初から教えたかどうか^{さだ}が定かでない。桜美林大学でフランス国歌『ラ・マルセイエーズ』を授業中に披露したのを^{かす}徹かに^{おぼ}憶えてはいる。その後1973年に立教女学院短期大学の非常勤講師も兼任し、翌年の1974年から実践女子大学にも籍を置く事となったのである。その時期にもシャンソンを当初から学生に教えたかどうか記憶に無いのである。

その当たりから私の心の中に『声楽』への想いが再び湧き出し、偶然の出逢いから^{くにたち}国立音楽大学教授の竹村令先生の教えを受ける事となり、4、5年して1982年に、竹村^{のり}令先生が立ち上げた『日仏歌曲研究所』に幸運にも入会が許され、10名程のうら若き音楽大学出身者ばかりの中であって、“黒一点”40歳代のおじさんが2年間、グノー、フォーレ、デュパルク、ドビュッシー、プーランクなどを歌う事となったのである。

当時シャンソンはまだ私とは疎遠であったと云う事が出来る。私が今日の『発声法』を^{えとく}会得したのは、実は^{たかみち}塩沢孝通先生に^よ因ってなのである。塩沢孝通先生の前に、私は竹村^{のり}令先生の生徒であった高橋^{みち}典子嬢から1年間位発声法を^{のぶやす}習った事がある。延安^{しょういち}昭一先生の時は^{から}気持ち^{から}を“空”にして体全体を“鳴らす”と云う、イタリアの『ベルカント唱法』であり、高橋^{みち}典子嬢の時は息の意識を腰から^{とうぶ}頭部に持ち上げて行く“ヴォリューム増大唱法”とでも云う物であった。体調の良い時は声が鳴り響いているような自覚があったが、何かすっきりしない“しこり”のような物が^{のど}喉と胸のあたりに残っていた。1年程して竹村^{のり}令先生からも習う事となったが、『フランス歌曲』のレポートは増えて行ったにも拘らず、発声に相変わらず^{まど}窮屈な部分が付き纏っていた。

低音の男性歌手の指導を受けて見ようと思ひ立ち、ある見知らぬ音楽大学の教授に

大胆にも電話をかけ、紹介して戴いたのがこの塩沢孝通先生しおざわたくみちなのである。1980年だったと思う。小田急線の『南林間』みなみりんかんと云う駅から徒歩7分程の平屋のアパートに奥様と5、6歳の息子さんとの3人で住んでいらした。身長165センチ位、体重60キロ位の浅黒い顔に知性の感じられる低音の持ち主であった。私はグノーの『夕べ』を聴いて戴いた。先生がその時伴奏して下さった記憶が微かに残っている。ピアノも確かに速者であった。……「Fシャープの音、良く出ますねー。低音から積み重ねて行って、高音の方も開発して行きましょう。」……最初の日はほとんどが雑談であった。昭和13年(1938)生まれである事、新宿高校の時の同級生に(日本が誇る国際的バス歌手としてオーストリアのグラーツやザルツブルグで活躍していたが、41歳で逝去した)大橋国一くにかずが居て、一緒に『六声会』ろくせいかいと云うコーラス部で歌い、共に東京藝術大学に進んだ事、その後大橋国一くにかずはオーストリアで認められるようになり、塩沢孝通先生たかみちの方はアメリカの『ジュリヤード音楽学院』で3年間の研鑽を経て帰国し、『東京室内歌劇場』に所属する傍らかたわ、(故)古沢淑子女史が主催する権威ある『フランス歌曲研究所』(フラ研)の会員であった事、指揮者の(故)若杉弘と親友である事、奥様が玉川大学の芸術学科出身である事、先生ご自身は、その当時、桐朋音楽大学・声楽科の非常勤講師である事等を、響きの豊かな“さび”の利いた低音でゆっくりと話して下さった。そして次の週から週1回のペースで塩沢孝通先生のレッスンが始まったのである。フォーレの《リディア》、《漁夫の歌》ぎよふなどの後にイタリア古典歌曲集(低声用)を勧められて、それまで歌った事のない曲を、先生の巧みなピアノ伴奏に合わせながら勉強を続けて行ったのである。レッスンは楽しかったが、先生の“響き”と私の“響き”とが初めから、どこことなく違ふと気が付いてはいた……先生は“バス”(低声)で私は“バリトン”(中声)だからだと思い、練習を重ねればもっと響くようになるだろうと自分を慰めていたのである。2、3ヶ月が過ぎた頃、私が風邪を引き、レッスンを休まなければならなかった事があった。こうした時、私のせっからな性格が頭を擡げもた、ガラガラの喉でも発声練習を続けてしまい、快復を遅らせ、よけいな薬を買ったりしてしまうのである。……2、3日して声に快復の兆しが見えた時、「♪ふうっ♪」と閃いたひらめ。「もしかすると……こうやるのかな?……」初声(しよせい)を腹の底で意識するのではなく、額から鼻の外側を滑らせるように通過させる、つまり、下から上へではなく、上から下へと切り替えたのである。……「響きが先生のに似ている!」……休み明けのレッスンで試みると、塩沢孝通先生たかみちは一言『そうですよ!』とおっしゃられた。それまでにも先生はリズム・音程について注意を促す傍らかたわ、特に高音の際、私が力みながら苦しうに声を張り上げると、先生が模範を示されて、私の反応を静かに待つて下さった。そして遂に3ヶ月して私はコツを身に付けたのである。かくして歌が安定し、のびやかになり、しなやかさが加わって来た。「裏声から出発し、響きかたわの一番小さなポイントを見つけ、顔面で、出来る

だけ薄く音を滑らせた後に、体全体を鳴らすように力を加えて行く・・・」これが塩
 沢孝通先生から掴んだ私の発声法である。

歌にもいろいろなジャンルがあり、歌詞があり、言語がある。どのような歌であつても現在に至るまで私の発声法はいつも同じである。オペラのアリアを歌う時も、演歌を歌う時も同じなのである。ジャズを歌う時も、シャンソンを歌う時も同じなのである。

「発声法」は所謂《ハード》の側面を持つ物である。歌における《ソフト》の側面とは詩の解釈であつたり、強弱やメロディの変化に応じる「表現法」であらうと思われる。

技術の伴わない歌唱も、表現力の伴わない技術も聴き手に感銘を与える事が出来ない（本当は技術も表現力もない無心の歌が最も心を打つのかも知れないが・・・）。ともかくこの両輪を磨く過程において、才能と訓練の継続とが不可欠であり、その結果、歌が花開き実を結ぶのである。『一曲は3分間の人生である。』・・・歌手はこの事を体験し、舞台での出来、不出来を噛み締めるのである。ステージに立つ前の、そして舞台上に立った時の、この緊迫感、歌が流れて行く間の、空気の微かなどよめき、上手く歌えた時の満足感と聴衆の拍手、演奏後のロビーでのこやかな雑談・・・こうした繰り返しがこの道に携わる人達の生き甲斐となっているのであろう。人はそれぞれの趣味を通して、独自の楽しみを持っている。実にさまざまな趣味が蠢いている。驚くべき人間の多様性!!!・・・惑わされずに自分の趣味に没入出来た人は幸いなるかな!!!

実践女子大学の授業中にシャンソンを取り入れたのは1976年位からだったと思う。

『月明かりの下で』と云う童謡を手始めに、シャンソンとして『サン・トワ・マミー』、『詩人の魂』、『さくらんぼの実る頃』・・・レコードから録音したイヴ・モンタンの『見る』、『四輪馬車』、『こんな風に生きる』・・・『聞かせてよ愛の言葉を』、『パリの空の下』・・・ミレイユ・マチュウが歌った『コルシカ』・・・『ばら色の人生』、『ラ・メール（海）』・・・エリコ・マシアスの『最後のチャルス』・・・ジョルジュ・ムスタキの『時は過ぎてゆく』・・・『枯葉』、『シェルブールの雨傘』、『パリ・カナリュ』、『オー・シャンゼリゼ』・・・と1990年頃まで続いたのであった。「シャンソンのフランス語」として私の授業は、他の担当科目の先生方にまで概ね好意的に知れ渡っていた。学生も一生懸命にメロディーと言葉を楽譜を見ながら覚えてくれた。当時は週2回同クラスを受け持っていたのでこのような事が出来たのであろう。2、3ヶ月後に学生は一人ずつクラスの友達の前で暗譜で歌ったのである！しかしこうした幸せな時は今はない・・・週2回同クラスのシステムが無くなってしまったという事もあるが、学生が声を出さなくなってしまったのである!!!

私が歌った後、復唱してくれないのである。そこで仕方なく、ビデオ、CD、BGM（バック・グラウンド・ミュージック）で気分転換を図るに留めているのである。

1998年頃、日野市の公民館（勤労青年会館）を借りて、『パラヴァス・フランス語』と銘打った社会人向けの講座を私は立ち上げた事がある。パラヴァス PALAVASとは南フランス・モンペリエの街から車で20分もかからない、地中海の海水浴場の事である。1969年から1971年（当時27歳～29歳）までモンペリエ大学に私が留学していた頃、外国人のクラスメートや日本人の友達としばしば訪れた憩いの浜辺である。この『パラヴァス・フランス語』に最初、16、7名の社会人が登録してくれた。月3回、日曜日の午後2時から約2時間、NHKのテキストを使ってゆったりとしたペースで雑談を交えながら授業を進めて行った。しかし、しばらくすると、受講者のフランス語学習歴の差がまちまちの為、中にはフランス語検定試験の準備の為に登録した方もいらして、授業が滑らかに機能しなくなり、半数以上の方が去って行ってしまったのである。幸か不幸か授業料が期限付きの前払いでなく、出席した時だけ千円を払えば良いという事にしてあったので受講者は休んでも辞めても左程、金銭的な損が生じないのである。部屋の予約も支払いも私が一人で行っていたのである。常連の4、5名の方々は私と波長が合って、帰りに喫茶店へ行ったり、その延長で居酒屋へ立ち寄りたり、ある時は日を決めて恵比寿のガーデンプレイス内にあるレストランでフランス料理を味わいに出かけたりもした。時折、新しい受講者が入会する事があって常連のメンバーも私も緊張の伴う嬉しさを味わったものである。当時男性にしても女性にしても大半が50歳前後の方々なので、授業中の雑談に生活と経験が滲み出ていて、味の心み込んだ日本料理に舌鼓を打っている様な楽しさがあった。実は受講者の中に日本語で歌うシャンソンのグループに所属している方が2、3人いらした。毎回、私は授業中、気分転換に原語で歌うシャンソンを指導していた。ある時、受講者の一人の御夫人が、男性が少ないので彼女の出演するコンサートで私に歌ってくれないかと頼みに来た。躊躇いながらも私は冒険心から引き受けた。ところがこの御夫人の意図は実のところ、7、8人位の会員を集めて新しいシャンソンの会を作ろうというものであった。かくして男性3人、女性4人のメンバーで第1回のコンサートが吉祥寺の由緒ある《ベル・エポック》La Belle Epoqueで2000（平成12）年11月26日（日）に開催された。我々のグループは〈らーじゅ・みゅーる〉（熟年）L'Age Mûrという名でデビューしたのである。指導者に田村良一氏を、ピアノ伴奏者に江口純子さんを迎え、5月頃から月に1、2度、一回4時間、各人の割り当てが25分位のレッスンを受けた。レッスンの終了後は毎回居酒屋で会議兼懇親会が行われ、友好を温めながら、お互いの人生観を知り、思いがけない情報を得る事が出来たのである。

演奏会の当日は晴天で、出演者は午前の10時30分に集合し、11時からのリハーサルに備えた。吉祥寺駅の井の頭公園口改札を出て、1分もかからないビルの2階が《ベル・エポック》である。螺旋階段を上った所にあるこのサロンの内装はバリ風に設えられ、イヴ・モンタンやエディット・ピアフなどの写真も飾られている。テーブルの置かれたソファの席は50名入るとかなり窮屈である。小さなステージの奥にマホガニー色のグラッドピアノが置かれている。ステージに向かって左側のソファの後の壁に大きな鏡があり、このサロンを広く見せている。ステージから少し離れた所に小さな流しの付いた物置がある。トイレがない。出演者の控え室もないので着替えなどはこのビルの2階か3階のトイレを利用する。出演者の荷物は、入り口の受付用のボックスの奥に確保されている。

コンサートは1部と2部とに分かれ、7名の出演者は2曲ずつ、前半と後半の2回ステージに立ち、計4曲を歌う。原語（フランス語）で歌うのは、佐藤龍夫氏と私だけである。佐藤氏はフランスに3年間程生活した事があり、雰囲気は自然と伝わって来る存在である。小柄で、スリムで、ハンサムで、洒落た着こなし、ロマンスグレイで、声はテノール、機械に強く、名カメラマン・・・該博な知識、辛口な批評・・・年齢不詳（当時65歳位）・・・。

このグループ、「らーじゅ・みゅーる」（熟年）の暗黙のリーダー佐藤龍夫氏がトップバッターでステージに立ち、50人程の聴衆に歓迎の挨拶をしてから2曲披露する。私は6番目に登場し、『ミラボー橋』と『私の心はヴァイオリン』を歌う。

スポットライトを浴びながら、青白い一条の光の前に聴衆の息遣いやうごめきが、後ろで奏でるピアノ伴奏の音と自分の声とが交じり合って、視線を浴びている緊張感の真っ只中に居る《自己》を意識した約3分間の後に受ける拍手・・・そしてもう1曲・・・。7名が歌い終わり、休憩時間となる。ドリンクサービスがあり、顔見知りと挨拶を交わし、雑談をする。15分してからピアノだけのメロディが奏でられる。そして第2部が始まる。私は2番目の登場で『枯葉』と『詩人の魂』の2曲をフランス語で歌う。各人共に第1部と同様に1曲目と2曲目の間で1、2分ほど話をする事になっている。私は『枯葉』を歌った後、次のような事を言った。

「私は毎朝ジョギングをします。今は秋真っ只中で家の近くの公園の小道の上に枯葉が積もっています。銀杏の枯葉です。私は小さい頃胃腸が弱かったので踏みしめていいものかどうかちょっと迷いました。」

こんな風に出演者7名が自分流に、歌に纏わるエピソードを紹介する。最後は出演者全員がステージに立ち、会場の方々と一緒に『オー・シャンゼリゼ』を歌って約2時間のコンサートが終わる。5時から「打ち上げパーティ」がこのサロンの隣りにある和風レストランで開かれる。

記念すべき第一回「らーじゅ・みゅーる」コンサートは大成功であった。このグルー

プのメンバーの平均年齢は、当時52歳ぐらいと推測できる。はっきりした年を互いに把握していない。

佐藤龍夫さんと私の他にもう一人男性がいる。最高齢（70歳位）の高橋貞吉さんである。背が高く、^{かっぶく}恰幅が良く、温厚で、良く響く低音の持ち主は趣味として歌の他に油絵もこなす。

リズム感に難があるが、その魅惑の歌声は冗談に「八王子のイヴ・モンタレ」の異名を持つ。女性陣もなかなか魅力的で、それぞれに会場の予約や会計などの事務関係の仕事もてきばきと^{さば}捌いてくれる。

熟年を謳歌しながらも、誰もが悩みを抱えている。この第一回「らーじゅ・みゅーる」コンサートに出演の予定であった夫人はご主人をその夏病気で亡くされた。またこのグループで一番若い夫人は^{うつびょう}鬱病の娘さんと暮らしている。その後の「らーじゅ・みゅーる」のメンバーに多少の変更があったが、毎回好評を維持していた。しかし遂に第6回で終止符を打つ事になる。6年間の伴奏ピアニストは江口純子さんが計2回、中野宏美さん、^{にしおか}ケミー西丘さん、初めての男性で若き^{かねます}兼益研二さん、そして最後に川口信子さんに引き継がれて行った。

その間、最高齢の高橋貞吉さんが体調を崩されたり、メンバーの内の一人の夫人は癌が7年後に再発して逝去された。御夫人方の本番のステージ衣装は^{あで}艶やかである。髪がきちんとセットされ、顔の化粧も念入りである。陽気な会話、生き生きした表情、^{まな}真剣な眼差し、^{こうしやう}時折起る哄笑・・・

実はその裏に潜む^{くすぶ}＜憶り＞がどの団体にも存在する。会費、日程、伴奏ピアニストの人選と謝礼の金額、練習所の予約、写真、録音・録画・・・その間にグループ内の人間関係の問題が否応なしに付き纏う。悪くすると、発言や行動によって、互いの心の中に生じる感情・・・その蓄積による（暗黙の）^{いさか}諍い・・・小グループ同志の反目・・・こうした事はどのような団体にも大なり小なり存在するに違いない。

かくして当「らーじゅ・みゅーる」も6年で解散となった。歌う側が全員^{しろうと}素人であるのに対して、伴奏するピアニストはプロである。しかし素人とは云え歌う人が主役である。そこで人によってはピアニストに注文を付ける。ピアニストの方も歌手にリズムや音程の間違いを指摘する事がある。通常こうしたやりとりは表面的には穏やかである。ところが双方共に気が強いと悪い結果をもたらす事になる。第6回の「らーじゅ・みゅーる」コンサートの1週間前があるメンバーが出演を辞退してしまった。コンサートは例年のように成功したけれども、この事によって事務的な支障をきたした。

ところが辞退した本人からの謝罪の言葉は一切無かった。年が明け、桜の季節の頃、メンバーが居酒屋に集まった際に、本人がにこにこしながらやって来た。私はその席で面と向かって当人^{なじ}を話したが、本人は左程動揺した態度を見せず、反駁もしなかった。

その時、普段本人と非常に仲の良い夫人が当人の非をはっきりと述べた。そしてその年、平成18（2006）年以降、自然解散のままとなってしまったのである。とは云ってもシャンソンのグループは他にもかなりの数を占めており、各人はそれぞれの元のグループや、自分に合いそうなグループに新規に入り直して歌い続けている。

私も実はその2、3年前から西野勲氏とピアニストの中野宏美さんが主宰するグループの演奏会に出演していた。西野勲氏は、ほぼ同年齢の佐藤龍夫氏と同じように、フランス語で歌う、云わば「原語派」であり、新宿のシャンソン教室でピエール・ジル氏の指導を受けている、シャンソンに執り付かれた初老の元サラリーマンである。

このグループはやがて「アミカル・ド・ラ・シャンソン」L'AMICALE de la CHANSONと名づけられ、今日に至っている。

シャンソンの伴奏はピアノだけという場合が多いが、それにベースが付いたり、アコーディオン、ヴァイオリン、シロサイザー、ドラムなども共演する事がある。楽器奏者はワルステージに、30曲ほど15分程の休憩時間を挟んで弾きまくるのであるが、総じて腰が低く、温厚で地味で真面目である。ただ普段の生活において、経済的に恵まれていない事が容易に見当が付くような身なりをしていて、顔の表情にも表れているのがある種の共感を呼ぶ。歌の内容に関して、例えば『アコルデオンの中』に貧乏なアコーディオン弾きが登場したり、『モンマルトルの丘』の中にも、これまた貧しい売春婦の少女が描かれている。作詞家、作曲家、歌手、伴奏者が一様に同じ様な境遇である事は少ないと思われる。特に趣味でシャンソンを歌っているご婦人たちの生活はかなり豊かであるに違いない。男性の中にも佐藤龍夫氏や西野勲氏のような人達は、定年を過ぎてから地道に悠悠自適の生活を謳歌しているように見受けられる。シャンソンのグループに所属するアマチュアの人達の中で大多数を占めるのが平均年齢が50歳を越す婦人たちであり、男性はほんの一握りである。男女共に若い人にはめったに会わない。しかし不思議な事に、5、6年前に聴きに行った事のある、東京都予選の「シャンソン・コンクール」で若者が10位以内に3、4名入っていた。その後こうした若者たちは何処で何をしているのだろうか？

ピアノ伴奏者達の中にも、クラシック音楽界に身を置く人とポピュラー音楽界に身を置く人とがいる。後者のほとんどがクラシック音楽から出奔したと言っても過言でない。クラシック音楽では楽譜通りに弾かなければならないのに対して、ジャズやシャンソンに於いてはアドリブが歌を引き立てる。どちらの場合に於いてもピアニストの人柄やセンスが係わって来る事は云うまでもない。歌仲間達からの噂が、知らず知らずの内に耳に入ってくる。「あの人の伴奏は歌い易い・・・」であるとか、「メロディーラインが私の先生に比べて素っ気ない・・・」であるとか、とにかく50年もの人生経験と耳の体験に堪え辛辣な批評が聞こえて来る。ピアニストのみならず

アコーディオン、ヴァイオリン、シシセサイザー、ドラムなどの伴奏者たちも、そうした素人の好みと実力とを感じ取りながら、真剣に弾き続けているように見受けられる。コンサートに出演するとなると、準備段階から、誰しも相当の覚悟を持って臨むに違いない。私の場合、毎朝、日野市立多摩平中央公園で行われるラジオ体操に参加する前と後との、単独早朝ジョギングの最中に、頭の中でメロディーと歌詞とリズムとを唱えながら15分ほど練習し続ける。発声練習は、朝食の前と後に、防音設備の無い2階の6畳の部屋で、合計約20分間、メトロノームと音程用の笛を使って行う。歌の方への時間がほとんど取れないのが残念である。週に1度、ピアニストの伴奏で、フランス歌曲およびオペラ、日本歌曲を練習する傍ら、シャンソンや日本の流行歌まで弾いて戴けるのは、大変恵まれた境遇にいると思わざるを得ない。さらに月に1度、JR中野駅近くの小さなミュージックサロン“ねね”で、シャンソンをプロのピアニストの伴奏に合わせて、10名程の方々と一緒に練習出来るのも幸せなことである。

2007年7月14日（日曜日）にささやかな栄光が私にもたらされた。この日、銀座6丁目にある、シャンソン喫茶“Ma Vie”（マ・ヴィ）でパリ祭・コンクールが行われた。数ヶ月前にピアニストの中野宏美さんから私に応募の打診があった。何事も経験だと思い、淡い冒険心のような、小学生が運動会の日を待つような気持ちで承諾した。“Ma Vie”（マ・ヴィ）には2、3回、土曜日の午後、ライブ演奏会のない、客に開放された時間帯で歌った事がある。2、30人しか座れないシャンソン喫茶であるが、内装が洒落ていて、如何にも銀座の店だと云う雰囲気漂っている。30余年の歴史を持ち、フランスや日本の一流歌手たちも歌いにやって来たとの事である。客として各界の著名人も訪れたそうである。経営者は、この店を1971年に創業した日高なみさんと云い、70歳を過ぎたかつての歌姫である。私はこうした情報に疎く、時折、耳にするシャンソン界の話題に今でも啓発され、刺激を受けている。インターネットを開くと、いろいろな店でのスケジュール表に歌手や伴奏ピアニストの名前を把握する事が出来る。銀座、新宿、渋谷、赤坂などに1、2軒位ずつ、私が訪れた事のないシャンソン喫茶が顔を連ねている。四谷、中野、荻窪、田園調布、横浜辺りにもある。ライブ演奏は、通常、19:00時頃始まり、23:00時頃終わるので、毎朝、4時15分に起床する私にとって、シャンソン・ライブに出掛けるのは、かなりの覚悟が要る。シャンソン喫茶の多くは、昼間は普通の喫茶店に変わったり、月に1、2度は客にステージを開放し、楽譜を持ち込ませ、プロの伴奏者の下、アマチュア歌手“唄の会”オンパレードというシステムを導入しているようである。入場料がドリレク付で2,500円、1曲500円が相場である。10名位の人が集まったとすると、3ステージ、合計3時間、1曲ずつ順番で各人、4、5曲歌う事になる。歌を聴きに来るだけの人はほとんどいない。ほとんど全員が、自分も歌い、人の歌を聴き、途中15分程の休憩時間に、初めての人とも言

業を交わしながら歌唱力を磨く事になる。3時間、一人、4、5千円の文化・教養体験費は高くない。このような所で体験を積み重ねて行く過程に、時折、開催される各地でのコンクールが特別な刺激を与えてくれる。力試しに因る自信の確認と栄光への名誉欲とが心の中で渦巻く時である。『このシャンソン喫茶“Ma Vie”（マ・ヴィ）でのパリ祭・コンクールにはどのような人が応募しているのだろうか・・・？ 実力者が^{ひし}が^{なか}群^{なか}め^{なか}いているに違いない・・・』なぞと若い頃の私ならピリピリするところだが、60半ばを過ぎたばかりの当時の私はほとんど無頓着と言って良いほど冷静であった。このアマチュア・シャンソン・コンクールには昼の部と夜の部があり、私は昼の部を選んだ。それぞれの部に30名位ずつの応募があったらしい。昼の部のピアノ伴奏者は中野宏美さんであった。私にとって7年前からのピアノ伴奏者であるので非常に有利であったと言える。このコンクールに、知り合いの小幡君枝さん、^{くすみ}久住由美さん、それに西野勲氏も応募していた事を、私は会場に来て初めて知ったのである。応募者の^{うち}中、男性は西野勲氏と私だけであった。歌う順番は、当日受付の際の抽選で決められていた。小幡君枝さんと西野勲氏は前半、私は中頃、^{くすみ}久住由美さんは最後の方であった。会場の雰囲気は^{わきあいあい}和気藹々としていて、普段の“唄の会”オンパレードと変わりがなかった。オーナーの^{つと}日高なみさんが審査委員長を、その弟さんが司会を務めた。一人1曲の一本勝負である。私は『愛の讃歌』をフランス語で歌った。軽妙な司会が雰囲気を益々盛り上げていた。NHKのど自慢コンクールの司会者のようなやりとりが歌の前後に取り交わされた。私はマイクを持った時、会場の方々へ挨拶の言葉を述べた。『皆さん、こんにちは！ 今日、銀座でパリ祭・コンクールと云うと緊張しますけれども・・・「愛の讃歌」というよりも「安易な参加」というつもりで歌わせて戴きます・・・』^{こうしょう}哄笑が起り、私の歌に情熱が吹き込まれた。フランス語のミスもなく、歌い終わった後、拍手と『ブラボー！』の声で沸いた。

結果発表で私の名前が最後に告げられた。賞金5万円、^{グランプリ}爽やかなGrand Prixであった。

(2009. 12. 3 記)

The Charm of “Chanson”

Hiroyasu TOGASAKI

The word “chanson” interested me in my high school days, when I heard the popular SUMO wrestler “SHINOBUYAMA” talk about his taste in answering an interviewer. In 1959 I attended for the first time in my life a “Chanson” concert at my Alma Mater Rikkyo University, given by Yoshiko ISHII.

Four years later in 1963, when I was admitted through examination into the third year of Rikkyo's French Literature Department. I met for the first time Rei NAKANISHI as one of my classmates, who gave me several months later an invitation ticket to a “Chanson” concert in Akasaka. And after a couple of years I dared to go alone to “GINPARI”, located in Ginza, in which Rei NAKANISHI used to work as a songwriter.

I was hardly interested in “Chanson”, while I belonged to the chorus circle, the so-called Glee Club from 1959 to 1963, majoring in economics at Rikkyo University. After 1963 I took a private lesson in classical songs. In 1969 I had a chance for two years to study French concerning its grammar, its history, its geography, its paintings, its film criticism and its literature in Montpellier University in the southern part of France. In 1971 I became a part-time professor of French at Obirin University. Then I taught classes at Tamagawa, Rikkyo - Jogakuin and finally Jissen Women's University. During those classes I taught also “Chanson” to the young students who enjoyed themselves during their recreation time. As for me I was much more interested in classical French songs and I was permitted to belong to the circle for experts, organized by Nori TAKEMURA in 1982.

One year later I had an opportunity to appear on the stage with those experts. Fifteen years later in 1998, by chance, I was asked to belong to a “Chanson” circle by a woman who was learning French from me in a small circle. I participated in the first joint concert, organized by the group called “L' Age Mûre” (The Matured Age) at the famous chanson cabaret “La Belle Epoque” (The Beautiful Epoch) in Kichijoji on November 26, 2000. This group lasted for 6 years. I have been singing “Chanson” as well as classical songs on small stages and occasionally at large ones.

While singing, I have a special feeling of fusion with the audience and the pianist,

other accompanists (guitarist, violinist, contrabassist, drummer etc.) in some cases. Preparations, a good humor, full of spirit, presence of mind, enthusiasm will produce good results.

It was on July 14, 2007 that I won the first prize at a small "Chanson" contest, held at the chanson cabaret, "Ma Vie" (My Life) which was located in Ginza, and was as noted as "La Belle Epoque" in Kichijoji. I sang in French the "Hymne à l'Amour" (Hymn to the Love) in front of about 30 candidates. I was in form in making a good start to the very end, receiving shouts of "BRAVO !!!"